見に行くのも三人、ようこなゐに意氣が合ふと思ふと可笑いてドムならん」
「今お前が相撲と云ふたんで思ひ出したが、相撲は玄人より素人相撲の方が面白いな、玄人は八百長なんてあつて不可んが、其の段素人は一生懸命や、此の間の宮相撲どうやつた、何とも云へん面白い相撲が一番あつたで、あの時の相撲取り何とか云ふたわい……そう〳〵竿竹、細長い男やつた、又片方がよう肥た象ケ鼻や、仲々よう取りよつた、行司が軍配を持つて、宜く見合して互ひに立つ氣になりませう、ヨイショと立上ると象ケ鼻は下へ藻繰り込みよつてやつと卷上げて來よつた、竿竹も仲々強い、ヨイショと上から押掛る、壓へつけられたらドムならんと象ケ鼻が前袋をこう持ちよつて、ウーンと引いた……」
「オイ何をするねん、寢てる者の褌をとらへてどうするねん」
「ドツコイショ」
「何がドツコイショや、痛い〳〵腹が締るがな、そう引張つたら痛い、そんな無茶しいな……お前がそうするねんやつたら俺もジツと仕て居られれん、上手からお前の褌にこう手を掛けてヨイショてやつぢや」
「何糞、ドツコイショ」
「ドツコイナてやつちや」

「何んやあな所で二人で相撲を取りだしやがつた、二人が相撲を取るとしてみると、ヂツと仕て居られれん、さしづめ俺が行司役で、軍配の代りに此の扇子で……ハツケヨイ殘つた〳〵」
「ドツコイ此方や」
「殘つた〳〵、勝負あつた」
「ホ、、、、無茶しないな、勝負あつたと云ふてるのに打投て、それ見いな床の間の柱で頭打つて、こんな大きな瘤が出來たがな、おまけに襖を蹴り破つてしもたがな……」
「伊八……伊八……」
「伊八とん、又二階の八番から手が鳴つてるで」
「なんや、これから寢ようと思ふて居るのに、よふ呼びよるな、ヘイ旦那さんお呼びやす」
「コレ伊八、敷居越では話がならん、モウ少々前へ參れ」
「ヘイ」
「當家へ泊つた節、其の方に金一歩遣はした」
「氣辛ないナ、ヘエ頂戴致しました」
「金一歩遣はしたは餘の儀ではない、夜前は泉州岸和田岡部美濃守の御領分、浪花屋と申す間狹なる宿へ泊り、有象も無象も一緒に寢かし居つた、順禮が詠歌を唱へるやら、六部が念佛を上げるやら、